
10/9/2 (Item 1 from file: 347) DIALOG(R)File 347:JAPIO (c) 2007 JPO & JAPIO. All rts. reserv.
05216410 **Image available**

**MANUFACTURE OF POSITIVE ELECTRODE ACTIVE MATERIAL FOR LITHIUM
SECONDARY BATTERY**

Pub. No.: 08-171910 [JP 8171910 A]

Published: July 02, 1996 (19960702)

Inventor: YAMAURA JUNICHI

OKAMURA KAZUHIRO

NITTA YOSHIAKI

Applicant: MATSUSHITA ELECTRIC IND CO LTD [000582] (A Japanese Company or Corporation), JP (Japan)

Application No.: 06-313140 [JP 94313140]

Filed: December 16, 1994 (19941216)

International Class: [6] H01M-004/58; C01G-053/00; H01M-004/02; H01M-010/40

JAPIO Class: 42.9 (ELECTRONICS -- Other); 13.2 (INORGANIC CHEMISTRY -- Inorganic Compounds)

JAPIO Keyword: R115 (X-RAY APPLICATIONS)

ABSTRACT

PURPOSE: To make a crystal structure to be of a single phase, and thereby obtain an oxide high in crystal finishing degree by mixing coprecipitated hydroxide which is obtained by adding alkali solution to the mixed water solution of manganese salts and nickel salts, with lithium compounds, and thereby sintering a products thus obtained at a specified temperature.

CONSTITUTION: In the manufacture of a composite oxide for positive electrode active material indicated by a formula, alkali water solution is added first to the mixed water solution of manganese salt and nickel salt the amounts of which are divided by a specified volumetric ratio, so as to be coprecipitated, the product is then filtered and cleaned with water, and a manganese nickel hydroxide is thereby obtained thereafter. It is proved by a X ray diffraction that the product is roughly of a single phase, and thereby its crystal finishing degree is high. Next, a specified amount of a lithium compound such as lithium hydroxide and the like is mixed to the aforesaid composite hydroxide so as to be sintered, and a composite oxide containing lithium with a crystal structure in which Li is easily moved, is thereby obtained. Furthermore, since its sintering temperature is set to be 600 to 800 deg.C, there occurs no disturbance in a crystal structure. By this constitution, the positive electrode active material can be obtained, which is high in capacity and excellent in cyclic characteristics. (in the formula, x is defined by $0.95 \geq x \geq 0.70$).

JAPIO (Dialog® File 347): (c) 2007 JPO & JAPIO. All rights reserved.

© 2007 Dialog, a Thomson business

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平8-171910

(43)公開日 平成8年(1996)7月2日

(51)Int.Cl.⁶

識別記号

府内整理番号

F I

技術表示箇所

H 01 M 4/58

C 01 G 53/00

A

H 01 M 4/02

C

10/40

Z

審査請求 未請求 請求項の数2 O L (全5頁)

(21)出願番号

特願平6-313140

(22)出願日

平成6年(1994)12月16日

(71)出願人 000005821

松下電器産業株式会社

大阪府門真市大字門真1006番地

(72)発明者 山浦 純一

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

(72)発明者 岡村 一広

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

(72)発明者 新田 芳明

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

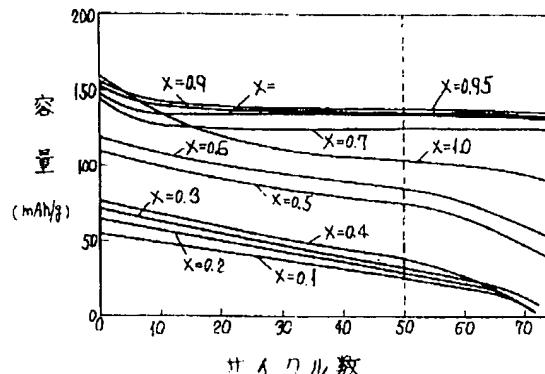
(74)代理人 弁理士 小鍛治 明 (外2名)

(54)【発明の名称】 リチウム二次電池用正極活性物質の製造法

(57)【要約】

【目的】 Niの一部をMnに確実に置換して一般式Li_{1-x}Mn_xO₂で表わされるリチウム含有複合酸化物の結晶構造をほぼ単一相とし、結晶完成度が高く結晶の崩壊がなく結晶内でLi⁺が移動し易い安定した結晶場を得ることができる製造法を提供する。

【構成】 ニッケル塩とマンガン塩との混合溶液にアルカリ溶液を加えてニッケルとマンガンの水酸化物を共沈させることによって得たニッケルとマンガンの複合水酸化物を用いてリチウム含有複合酸化物を合成する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】リチウムとニッケルおよびマンガンを含むリチウム含有複合酸化物で、一般式 $L_iNi_xMn_{(1-x)}O_2$ で表わされる式中のx値を $0.95 \geq x \geq 0.70$ とする正極活物質の製造方法であり、マンガン塩とニッケル塩との混合水溶液にアルカリ溶液を加えてマンガンとニッケルの水酸化物を共沈させることによってマンガンとニッケルの複合水酸化物を得た後、水酸化リチウムなどのリチウム化合物と混合し、この混合物を焼成することを特徴とするリチウム二次電池用正極活物質の製造法。

【請求項2】マンガンとニッケルの複合水酸化物とリチウム化合物との混合物を、 600°C 以上 800°C 以下で焼成する請求項1記載のリチウム二次電池用正極活物質の製造法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明はリチウム二次電池の、とくにその正極活物質の製造法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】近年、電子機器のポータブル化、コードレス化が急速に進んでおり、これらの駆動用電源として小形・軽量で、高エネルギー密度を有する二次電池への要望が高い。このような点で非水系二次電池、特にリチウム二次電池はとりわけ高電圧・高エネルギー密度を有する電池として期待が大きい。

【0003】このような中で L_iCoO_2 を正極に、炭素材料を負極に用いた電池が開発されている。 L_iCoO_2 の作動電位は L_i に対して 4 V と高いため電池電圧が高くなるとともに、負極に炭素素材を用いてインターカレーション反応を利用しているため金属 L_i を負極に用いた場合の課題であったデンドライト状 L_i が負極上に析出することではなく電池の安全性を向上させることができる。

【0004】しかし、 Co の資源の問題とコストの問題から、 L_iCoO_2 に代わるリチウム含有複合酸化物の開発が進んでおり L_iNiO_2 などが注目されはじめた。 L_iNiO_2 ならびに L_iCoO_2 をはじめとするこの種のリチウム含有複合酸化物はいずれも高い電位を示し、かつインターカレーション反応の利用できる同じ六方晶系の結晶構造をもつ層状化合物であるため、正極活物質材料としてその期待が大きい。このような観点から、例えば $L_i_xNiO_2$ （米国特許第4302518号）、 $L_i_yNi_{2-y}O_2$ （特開平2-40861号公報）などの L_iNiO_2 に係るもの、あるいは $L_i_xNi_xCo_{1-x}O_2$ （特開昭63-299056号公報）や $L_i_yNi_{1-x}M_xO_2$ （但し、MはTi, V, Mn, Feのいずれか）などの L_iNiO_2 のNiの一部を他の金属に置換したリチウム含有複合酸化物が提案されている。その他、 $A_xM_yN_zO_2$ （但し、Aはアルカリ金属、Mは

遷移金属、NはAl, In, Snの一種）（特開昭62-90863号公報）や $L_i_xM_yN_zO_2$ （但し、MはFe, Co, Niの中から選ばれた少なくとも一種で、NはTi, V, Cr, Mnの中から選ばれた少なくとも一種）（特開平4-267053号公報）などのリチウム含有複合酸化物も提案されている。そしてこれらの活物質材料を用いて 4 V 級の放電電位をもった高エネルギー密度のリチウム二次電池の開発が進められている。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】これらのリチウム含有複合酸化物の中で L_iNiO_2 はリチウムに対し 4 V の作動電位を示すので、正極活物質として用いると高エネルギー密度を有する二次電池が実現できる。しかし、電池の充放電サイクルの経過にともなって電池容量が劣化し、50サイクル目では初期容量の65%まで低下し、良好な充放電サイクル特性が得られないという課題があった。

【0006】このような課題に対し、上記に示すようなNiの一部を他の金属に置換したリチウム複合酸化物や多種の金属元素を同時に含むものなどが提案されてきた。しかし、 L_iNiO_2 のNiの一部を他の金属に置換したものはサイクル可逆性が向上する一方、放電容量が小さくなり、かつ放電電圧も低くなる傾向にあり、本来要望されている高電圧、高エネルギー密度という特徴を減ずる結果となった。これらの中でNiの一部をMnに置換したものはサイクル可逆性、放電容量、放電電圧のいずれも他のリチウム含有複合酸化物に比べると比較的良好であった。

【0007】ここで、 L_iNiO_2 のNiの一部をMnに置換した活物質の合成は、水酸化リチウムなどの L_i 化合物と水酸化ニッケルなどのNi化合物に二酸化マンガンや硝酸マンガンなどのMn化合物を加えて焼成する方法（以後、複合式合成法と呼ぶ）が一般的であった。この混合焼成法ではNiの一部をMnに確実に置換するためには少なくとも 800°C 以上の焼成温度が必要で、この温度以下ではX線回折を見る限り置換反応は完結しておらず、单一相を有する結晶完成度の高い化合物は得られなかった。

【0008】しかし、 800°C 以上の高温で合成すると結晶中で L_i の入るべきサイトにNiやMnが入り込んでしまい、結晶構造が乱れてしまいサイクル可逆性や放電容量が低下していた。このように L_iNiO_2 を基本にするリチウム含有複合酸化物を高温で焼成することはあまり好ましくなかった。

【0009】本発明は、このような課題を解決するものであり、Niの一部をMnに確実に置換して一般式 $L_iNi_xMn_{(1-x)}O_2$ で表わされるリチウム含有複合酸化物の結晶構造をほぼ单一相とし、結晶完成度が高く結晶の崩壊がなく結晶内で L_i が移動し易い安定した結晶場を得ることができる製造法を提供するものである。

【0010】

【課題を解決するための手段】上記課題を解決するために、本発明のリチウム二次電池用正極活物質の製造方法は、リチウムとニッケルおよびマンガン組成よりなる複合酸化物で、一般式 $L_i N_{1-x} Mn_{(1-x)} O_2$ で表わされ、式中の x 値を $0.95 \geq x \geq 0.70$ とする正極活物質の製造方法であり、マンガン塩とニッケル塩との混合水溶液にアルカリ溶液を加えてマンガンとニッケルの水酸化物を共沈させることによってマンガンとニッケルの複合水酸化物を得た後、水酸化リチウムなどのリチウム化合物と混合し、この混合物を 600°C 以上 800°C 以下の温度範囲で焼成するものである。

【0011】

【作用】本発明の製造法では、マンガン塩とニッケル塩との混合溶液にアルカリ溶液を加えてマンガンとニッケルの水酸化物を共沈させることによりニッケルとマンガンの複合水酸化物（以下、 $Ni \cdot Mn$ 複合水酸化物）を得ているので、結晶構造が Ni の一部を Mn で確実に置換した固溶体レベルに至っており、X線回折でもほとんど単一相になっていて結晶完成度が極めて高いものとなっている。

【0012】そして、この $Ni \cdot Mn$ 複合水酸化物に L_i 塩を加えて焼成すると、結晶内で L_i が移動し易い結晶構造を有するリチウム含有複合酸化物を得ることができる。さらに本発明では焼成温度を $600^{\circ}\text{C} \sim 800^{\circ}\text{C}$ としているので結晶構造の乱れはない。

【0013】また、 Ni と Mn の混合原子価状態を形成して安定した結晶構造を得るために、少なくとも Ni の Mn への置換数は 0.05 以上必要である。しかし、 Ni の Mn への置換数が 0.30 を超えると結晶の歪みの増大や結晶構造の崩れの発生、および混合原子価状態の不釣り合いで L_i が動き難い状況を作り出して活物質の容量低下が著しくなる。

【0014】

【実施例】以下、本発明の実施例を図面を参照しながら説明する。

【0015】まず、本発明の $Ni \cdot Mn$ 複合水酸化物の共沈による製造法を説明する。市販試薬の硫酸ニッケルを水に加え、飽和状態の硫酸ニッケル水溶液を作成し、これに所定量（目的の Mn/Ni 比に合わせて）の硫酸マンガンを加え、さらに水を加えて調整して硫酸ニッケルおよび硫酸マンガンを含む飽和水溶液を作成した。次いで、攪拌しながらこの水溶液に水酸化ナトリウムを溶解したアルカリ水溶液をゆっくりと加えていくと、 Ni と Mn の水酸化物の沈殿（共沈）が同時に始まった。十分にアルカリ溶液を加えて沈殿が終了したのを見極めた後、濾過して沈殿物を回収し水洗した。 pH を測定しながら水洗を繰り返し、残存アルカリがほぼ無くなったのを見極めた後、熱風空気 (100°C に設定した熱風乾燥器を用いた) で乾燥させた。

【0016】このようにして得られた $Ni \cdot Mn$ 複合水酸化物のX線回折パターンはきわめて単一相に近いものであり、元素分析の結果、ほぼ目的の比率で Mn と Ni を含んでいた。

【0017】なお、本実施例では共沈原材料の Ni 源として硫酸ニッケル、マンガン源として硫酸マンガンを用いたが、ニッケル源として硝酸ニッケル、マンガン源として硝酸マンガンなど、基本的には水溶液を作りうる塩であればいずれも使用可能である。また、アルカリ溶液としては水酸化ナトリウム水溶液を用いたが、水酸化カリウム水溶液、水酸化リチウム水溶液など他のアルカリ溶液であっても良い。

【0018】次いで、 L_i 化合物との焼成工程を説明する。 L_i 化合物としては水酸化リチウムを用い、上記共沈で得られた $Ni \cdot Mn$ 複合水酸化物に Mn と Ni の原子数の和と L_i の原子数が等量になるように加えてボールミルで粉碎しながら十分混合し、この複合物をアルミニナ製るつぼに入れ酸素中において 550°C で 20 時間で 1 段目の焼成をした後、 750°C で 2 時間で 2 段目の焼成をした。焼成後室温までゆっくりと冷却し、粉碎したものを正極活物質粉末とした。

【0019】 Mn/Ni 比の異なるいくつかの $Mn \cdot Ni$ 複合水酸化物について合成を試みた結果、活物質の組成を示す一般式 $L_i N_{1-x} Mn_{(1-x)} O_2$ の x 値が 0.7 以上であるとこのリチウム含有複合酸化物の X 線回折パターンが単一相で得られた。しかし、 x 値が 0.7 未満になると X 線パターンはほぼ単一相ではあるものの、ピーク強度が弱まり結晶性が低下する傾向があった。さらに、 x 値が 0.5 を下回ると、六方晶系の層状構造が崩れていた。

【0020】そして、この正極活物質 100 重量部に対してアセチレンブラックを 5 重量部加え十分に混合した後、この混合物を N-メチルピロリジン（NMP）の溶媒に接着剤のポリフッ化ビニリデン（PVDF）を溶解した液で練りペーストとした。なお、PVDF の量は正極活物質 100 重量部に対して 4 重量部となるように調整した。次いで、このペーストをアルミ箔の片面に塗着した後、乾燥して圧延し極板とした。図 1 は本発明の実施例に用いたコイン形リチウム二次電池の縦断面図である。図 1 において、正極 1 は前記極板を円板状に打ち抜いたもので、正極ケース 2 の内側に設置したものである。また、負極 3 は金属リチウムをステンレス鋼製ネット 5 上に圧着したもので、封口板 4 の内側にスポット溶接されている。正極 1 と負極 3 の間にはポリプロピレン製セパレータ 6 が配されており電解液 7 が注液されている。また、ポリプロピレン製ガスケット 8 を介して密封した。なお、電解液には 1 モルの六フッ化リン酸リチウム ($L_i PF_6$) を炭酸エチレン (EC) と炭酸ジエチル (DEC) の混合溶媒中に溶かしたもの用いた。

【0021】そして、一般式 $L_i N_{1-x} Mn_{(1-x)} O_2$ で

表わされる正極活物質の x の値を 0.1, 0.2, 0.3, 0.4, 0.5, 0.6, 0.7, 0.8, 0.9, 0.95, 1.0 とし、これらを用いて上記と同様の方法でコイン形電池を作製した。なお、 $x = 1.0$ は Mn を含まない LiNiO_2 である。ついで、これらの電池を用いて充放電サイクル寿命試験を行った。充放電条件は、室温（20°C）で正極に対して 0.5 mA/cm² の定電流で充放電し、充電終止電圧を 4.3 V、放電終止電圧を 3.0 V として行った。

【0022】図2は充放電サイクル試験の結果で、 $x = 0.1 \sim 0.4$ の範囲の正極活物質は初期容量が 50 ~ 80 mAh/g と小さく、かつサイクル劣化も大きく、50サイクル目で初期容量の 50% まで低下し、その後も劣化が進んだ。

【0023】 $x = 0.5 \sim 0.6$ の範囲の正極活物質は初期容量が 110 ~ 120 mAh/g であったが、サイクル劣化が大きく、50サイクル目で初期容量の 70% まで低下し、その後も劣化が進んだ。

【0024】 $x = 0.7 \sim 0.95$ の範囲の正極活物質は初期容量が 140 ~ 150 mAh/g と大きく、かつサイクル劣化も小さく、50サイクル目で初期容量の 90% を維持しているとともにそれ以後のサイクルの繰り返しにおいても容量低下がほとんど見られなかった。ところが、 $x = 1.0$ で Mn を含まない正極活物質は初期容量こそ 150 mAh/g 以上のものが得られるもののサイクル劣化は大きく、50サイクル目で初期容量の 65% まで低下し、その後も劣化が進んだ。

【0025】以上の結果からも明らかのように、共沈により調整した $\text{Ni} \cdot \text{Mn}$ 複合水酸化物を用いて合成した活物質 $\text{LiNi}_x\text{Mn}_{(1-x)}\text{O}_2$ における x の値は 0.7 ~ 0.95 の範囲のものが好ましい。

【0026】次に、一般式 $\text{LiNi}_x\text{Mn}_{(1-x)}\text{O}_2$ で表わされる正極活物質の x の値が 0.70 ~ 0.95 の範囲のものについて焼成温度を変える検討を行った。1段目の焼成である 550°C 20 時間の工程は上記と同様に行い、その後の焼成について焼成温度を 550°C, 600°C, 650°C, 700°C, 750°C, 800°C, 850°C, 900°C とした。そして、これらの正極活物質を用いて上記と同様の電池を構成し、上記と同様の条件の充放電サイクル試験を行った。図3にこの結果を示す。なお、上記式中の x 値は 0.8 とした。

【0027】図3からも明らかなように、焼成温度を 600°C ~ 800°C として合成した活物質が初期容量、ならびにサイクル特性も良好で、550°C のものは初期容量、サイクル性とともに不十分で、850°C ~ 900°C のものは初期容量が若干小さくなり、サイクル劣化も大きくなつた。

【0028】以上の結果より、正極活物質の焼成温度は 600°C ~ 800°C が良いが、800°C になるとサイクル劣化が若干大きくなり、初期容量も若干小さめにな

り、600°C になると初期容量は良好なもののサイクル劣化が若干大きくなるので、650°C ~ 750°C が好ましい。

【0029】本実施例では、 x 値が 0.8 の場合のものについて述べたが、 x 値が 0.70 ~ 0.95 の範囲のものについてそれぞれ同様の焼成温度に関する検討を行った結果、 $x = 0.8$ の場合と同様の傾向を示す結果が得られた。

【0030】従来の混合式合成法を用いて、 $\text{LiNi}_{0.8}\text{Mn}_{0.2}\text{O}_2$ の組成を有する正極活物質を合成した。まず、水酸化ニッケルと水酸化リチウムと水酸化マンガンとを $\text{Ni} : \text{Mn} : \text{Li}$ の原子比が 0.8 : 0.2 : 1.0 となるように秤量し、ボールミルで粉碎しながら混合し、混合物をアルミナるつぼに入れ酸素中において 550°C, 20 時間で 1段目の焼成をした後、750°C, 2 時間で 2段目の焼成をした。焼成後室温までゆっくりと冷却し、粉碎したものを正極活物質とした。この活物質の X 線回折パターンは単一相にならず、複数相が存在するものとなった。そこで、2段目の焼成温度を 650°C ~ 900°C の範囲で変える検討を行った結果、焼成温度を 800°C 以上にすることによって単一相が得られるようになった。

【0031】図4は上記各温度によって作成した活物質を用いて上記と同様の充放電サイクル試験を行った結果であるが、焼成温度を 650°C ~ 750°C とした正極活物質は単一相の結晶構造が得られなく、初期容量も小さいとともにサイクル劣化が著しく、ほとんど 50 サイクル時点で初期容量の 50% 以下に低下し、その後も劣化が進んだ。

【0032】一方、800°C 以上の焼成温度で合成した活物質は結晶構造が単一相となり、50 サイクル時点で初期容量の 80% を維持するが、容量値が 100 mAh/g 以下になりさらに減少した。

【0033】

【発明の効果】以上のように本発明のリチウム二次電池用正極活物質の製造法では、ニッケル塩とマンガン塩との混合溶液にアルカリ溶液を加えてニッケルとマンガンの水酸化物を共沈させることによりニッケルとマンガンの複合水酸化物（以下、 $\text{Ni} \cdot \text{Mn}$ 複合水酸化物）を得ているので、結晶構造が Ni の一部を Mn で確実に置換した固溶体レベルに至っており、X線回折でもほとんど単一相になっていて結晶完成度が極めて高いものとなっている。そして、この $\text{Ni} \cdot \text{Mn}$ 複合水酸化物に Li 塩を加えて焼成すると、結晶内で Li が移動し易い結晶構造を有するリチウム含有複合酸化物を得ることができ、容量が大きくサイクル特性に優れた正極活物質を得ることができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本実施例に用いたコイン形リチウム二次電池の断面図

【図2】 x 値を変化させたときの正極活性物質の容量とサイクル数との関係を示す図

【図3】焼成温度を変化させたときの正極活性物質の容量とサイクル数との関係を示す図

【図4】従来の製造法により合成した正極活性物質の容量とサイクル数との関係を示す図

【符号の説明】

1 正極

2 正極ケース

3 負極

4 封口板

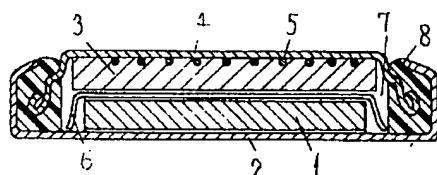
5 ステンレス鋼製ネット

6 セパレータ

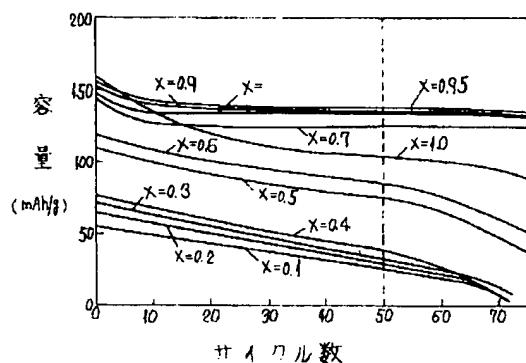
7 電解液

8 ガスケット

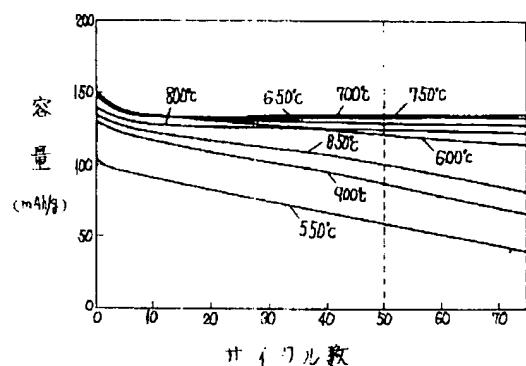
【図1】



【図2】



【図3】



【図4】

